

## 第4節 声の復権と国語教育の活性化

### 1 現代社会の状況と学習者の声の衰退

本節では特に「話すこと・聞くこと」の領域に関して、教材開発および授業開発にかかわる問題点に言及する。関連して韻文の指導法にも触れることになる。そこでまず指摘しなければならないことは、教室での学習者の声が衰退しているという事実である。それは一つに、現代の日常生活の中から「話すこと」に関わる場面が減少している状況と無縁ではない。自動販売機やコンビニエンスストア、そしてインターネットでのショッピングが普及したことは、小売店の店員と会話する場を奪うことになった。子どもたちの世代の必需品となった携帯電話は、電話という機能よりも携帯メールという新たなコミュニケーションの在り方を定着させた。さらに携帯電話によって楽しむことができるものも含めた小型ゲーム機の普及は、子どもたちに次々と新たな個人的な楽しみを提供しつつある。ヘッドホンステレオを聞きながらひたすら携帯電話の画面を眺める若い世代は、声による対話という原初的なコミュニケーションとは無縁な世界に生きているようにも見える。

このような傾向は、コンピュータの普及によってさらに加速した。日々の暮らしの中で、声を通してひとと交流する時間よりも、黙ってディスプレイと向き合う時間の方が主流になってしまった。

さらに注意したい現象として、テレビ番組におけるテロップ（スーパー）の多用という問題がある。ニュース番組を初め、多くの番組におびただしい数のテロップが登場する。人物の談話はことごとくテロップによって文字化されることから、視聴者は人物の話に注意深く聞くことを止めて、単にテロップの文字情報に目を通すだけになる。話を聞くよりもテロップを見る方が、効率よく容易に情報を得ることができる。話した内容とは異なる情報がテロップとして書き加えられたり、番組を作る側の意図で脚色されたりもするという危険性も深刻だが、異常なまでのテロップの普及は、視聴者の「聞くこと」に関わる能力を減退させることになりかねない。

現代社会の中で直接「話すこと・聞くこと」に関わる場面が減少しているという事実は、学習者の声を衰退させる原因の一つになっていると思われる。教室の内外で発せられる彼らの声には、活力が感じられない。現代の社会的背景を的確に分析したうえで、コミュニケーションの問題に目を向けながら声の復権を考えることは、これからの国語教育の重要な課題となるはずである。

わたくしはすでに国語教育の活性化に直結する「声の復権」の課題について、具体的な実践を取り上げながら紹介した<sup>1</sup>。本節ではすでに紹介した実践をも含めて、改めて本研究で扱うサブカルチャー教材を用いた音声言語表現の指導を試みた早稲田大学の「よむよむ座」での実践を含めて、国語科の授業における「声の復権」のための課題と対応策を提案する。

### 2 現代社会の状況をふまえての授業構想

現代社会の構造が、子どもたちから声を奪う結果になってしまったことはすでに触れた。だからこそ学校では、「話すこと・聞くこと」の学習指導を充実させて、子どもたちの声の復権を図る必要がある。それはもちろん国語科だけに特化した課題ではない。学校全体で、教職員が協力して取り組むのが理想である。ただし声の復権のために、特に国語科が担うべき要素は多い。

前の項で、子どもたちの声が衰退していることの原因の一つとして、現代の社会的な背景を考えてみた。その特徴を踏まえて、「話すこと・聞くこと」に関わる授業を構想することができる。一例として、教室にいくつかの仮想店舗を作るという授業を工夫する。店ごとにグループに分かれた子どもたちを、さらに店員と買い物客とに役割分担する。具体的なショッピングの場面を想定して声をかけ合う。簡単な場面から入って、次第に店員からお客に別の品を勧めたり、客から店員にいろいろと質問したりするような複雑な場面へと移行する。ショッピングが済んだ後で、適切なコミュニケーションが実現できたかどうかを相互に評価する。この実践は、現代社会から失われつつある場面を、国語の授業に復活させたいという「話すこと・聞くこと」の言語活動を推進するものである。

テレビ番組のテロップの問題に関しては、あらかじめテロップの付いていない話を録画したものを紹介して、その人物の話を聞いてテロップを書くという授業を構想することができる。スタジオでゲストが討論する場面を収録し、授業ではそれを繰り返して再生する。グループごとに人物を分担して、それぞれの分担した人物の話をテロップのように文字にする。グループ内で付き合わせて検討した後で、それをプリントにまとめて配布する。クラス全体で再度番組を見ながらプリントの記述を参照し、実際の人物の会話と比較してみる。「聞くこと」の活動を「書くこと」と関連させる実践として成立する。

いくら時代の変容を嘆き、学習者を叱責しても、彼らを取り巻くことばの環境が改善されるものではない。発想を転換して、現代社会の状況をむしろ逆手に取った授業の構想を工夫することを積極的に考えてみたい。

テレビ番組においてテロップが多用されていることの問題点に関して言及したが、その実態を踏まえた国語科の授業構想が展開できるはずである。以下に、テレビにおけるテロップを用いた授業の指導過程の概要を示す。

- ① テロップが入るニュース番組をビデオに収録する。実際にいくつかのニュース番組を録画して、そのストックの中から学習者の興味・関心の所在を調査したうえで、実践に移すことになる。主に、人物の談話を収録する。
- ② まず授業で紹介するニュースについて、どのような話題が取り上げられているのかを簡単に紹介する。それから、どのような人物が登場するのかを確認し、その人物の台詞に注意するように促す。
- ③ まず人物の表情を紹介し、その人物の話に耳を傾ける。続けて、映像を写さないようにして、音声のみを放送する。学習者は話の要点やキーワードをメモしながら聞く。
- ④ 聞いたことを文章にまとめて、テロップのための原稿を書く。メモを参照しながら、原稿を作成する。
- ⑤ 実際のニュースの映像を改めて紹介し、番組側で作ったテロップを見て、自分の考えた案との比較・検討をする。

この授業では、まず人物のイメージをもとにして音声からその談話の内容を聞き取り、

それを文字にするという活動が展開されることになる。そして学習者自身にテロップを作成させたうえで、授業の最後で再度ニュース番組を放映する。今度はテロップが付いた映像をともに紹介し、実際に作成したテロップとの比較・検討をすることになる。特によく聞き取れなくてテロップが作成できなかった会話があれば、その箇所には特に注意する。さらに、番組のテロップが、実際の談話の内容と異なるものであった場合、その理由やテロップを書いた側の意図についても検討を加える。

授業の時間に余裕があれば、この後にテレビにおけるテロップの効果と問題点について考えるという、メディア・リテラシーにつながる内容の学びを加えることができる。指導過程のすべての段階で学習者の意識をことばに向け、ことばの働きを常に考慮するような学びが展開できるように配慮したものである。

このようなテレビのテロップを取り上げた授業は、学習者の生きる「いま、ここ」に直接つながる学びである。このような授業を意欲的に導入しつつ、「聞くこと」の能力をしっかりと高めておきたい。高度情報化が急速に進展する現代社会において、「話すこと・聞くこと」に関わる場面は減少し、声を中心とした身体感覚が衰退しがちであるという問題にはすでに触れた。ことばの教育を担う国語科において、いま声の復権はきわめて重要な実践的課題となっている。「聞くこと」を含めた声によるコミュニケーションを活性化させ、教室に、そして学校全体に学習者の生き生きとした声が溢れるようにするために、様々な方策を検討する必要がある。

### 3 「話しかけのレッスン」の実践

学習者の声の衰退は、教室での声が小さいという現象に端的に表れている。返事をする声、教師の発問に答える声、音読・朗読の際の声が小さくて、教室の他の学習者まで届かないことが多い。特に上級学年になるにつれて、この傾向が顕著になる。相手に届く大きさの声を出すように導くことから出発しなければならない。具体的な実践として、一つは「しっかりと声を出すこと」を目標とした、いまひとつは「相手に声を届けること」を目標とした学習指導を工夫することが必要である。

発声のトレーニングは、放送や演劇の分野でよく行われている。呼吸法や口の開き方などの身体的な技法の指導も必要に応じて展開する必要もある。ただし実際の授業では、むしろ声を出して相手に届けるという場面を設定して、活動を通して「声」を獲得することに主眼を置くことにしたい。演劇のワークショップの中には、授業構想の参考に資するものが多い。

その一つに竹内敏晴の「話しかけのレッスン」がある<sup>2</sup>。このレッスンに学んで、国語科で次のような「話しかけのレッスン」の授業を工夫してみた。「話しかけのレッスン」は、1クラスの学習者を5人ずつのグループに分けて実施する。まずクラス全員の前でレッスンのモデルを示して、クラス全員がその方法をよく理解してから、グループに分かれて活動を展開する。以下に指導過程の概要を示す。

- ① 5人のグループの中で、まず1人がことばをかける側、他の4人がことばを受ける側になる。
- ② ことばをかける側の学習者を中心として、4人が距離をほぼ等間隔にして離れて立つ。

- ③ ことばをかけられる側は、全員目を閉じて、耳を澄まして待つ。
- ④ 話しかける側は、4人の中から1人だけ話しかけの対象とする人を選ぶ。「こんにちは」などの短い呼びかけのことばを、その相手に向かって話しかける。その際、誰に向けて声をかけたのかが分かるように、その人の方に手を向けることにする。
- ⑤ 自分に話しかけられたと思ったら、黙って手を挙げる。自分ではないと思ったら、誰に向けて話しかけたのかを判断して、そちらの方向に手を向ける。
- ⑥ 話しかけが済んだら全員目を開いて誰に向かって届けられたことばだったのかを確認したうえで、適切に声が届けられたかどうか、簡単なコメントを述べ合う。

この授業は、体育館のような広い場所で実施するのが理想である。5人のグループの中で、全員が交替して話しかける側を務めるまで続ける。一通り実施したら今度は目を閉じるのではなく、後ろ向きになったり話しかけられる人物の距離を変えたりして、同じ方向性のレッスンを繰り返す。話しかけた相手にうまく声が届かなかったような場合には、何度か繰り返して実施するようにしたい。このようなレッスンを通して、学習者はどのようなことばを、どのような大きさの声で相手に届けたらよいかということを、実際の場面を通して学ぶことができる。

「話しかけのレッスン」では、相手にしっかりと聞こえるような声を出して、心を込めてことばを届けるように指導する必要がある。大切なのは、実際の活動を通して学ぶことにある。子どもたちはレッスンを通して、声の出し方、声の大きさ、話しかける際のことばなどを学ぶことになる。

いま紹介した「話しかけのレッスン」に関する内容をさらに工夫して、国語科の授業に取り入れることができる。例えば、ことばを届けながら同時にバレーボールを相手に向かって投げるといったレッスンも実施できる。相手となった者は、ことばを受け取ると同時にボールも受け止めることになる。ボールという具体的なものと同時に、ことばを受け取ったという実感を大切にすることがある。授業を通して、彼らは声を出すということの身体的な感覚をつかむことができる。その感覚を、毎日の授業の中で継続して磨くことができるように配慮したい。

本項では声の復権のための学習指導について、まず相手に声を届けることから考えてみた。特に「話すこと・聞くこと」の指導で重要なことは、指導項目を取り立てて重点的に扱うのではなく、毎日の授業の場で総合的かつ継続的な扱いをすることである。文字言語に比べると、音声言語はより深く学習者の日常に関わっている。日ごろから自分の声に自覚的になるような在り方が望ましい。そして彼らが、相手に声を届けるということの重要性を認識することができるように導きたいと思う。

#### 4 早稲田大学の「よむよむ座」での実践

次に、声の復権に関わるわたくし自身の実践を紹介してみたい。2007年現在、わたくしは早稲田大学の教育学部において「国語表現論」と称される講座を担当している。この講座の中でも、大学生に対する声の活動の実現に向けた努力を続けている<sup>3</sup>わけだが、本項では特に「よむよむ座」と称される「ライブ・スポット」において取り上げた試みを紹介することにしたい。

「よむよむ座」の具体的な活動については、主催者の金井景子が「朗読の現場を創る—学校の中のライブ・スポット、『よむよむ座』の試み」（『月刊国語教育』2000.9）において詳しく紹介している。「よむよむ座」とは、2003年から2005年にかけての3年間、35回にわたって開催された「声の劇場」とも称されるべきイベントだが、その具体的なプログラムは早稲田大学金井研究室のホームページに示されている。金井は前掲論文の中で、「よむよむ座」の目指すところに触れつつ、自らのライフワークに言及した。

本を読むのが苦手な人にも、朗読を通して文学作品の魅力を知ってもらいたい—そのために、朗読とは何かを手探りしながら実践することが、私のライフワークの一つである。朗読とはこういうものであると決めつける前に、口承芸能や演劇、詩歌の朗唱、楽曲の歌唱、そして外国語の作品の朗読など、隣接領域にも目や耳を向けてじっくりと攻めていこうと考えている。

2003年11月19日、大学の昼休みの時間の12時20分から約30分間、「詩歌を読むこと、歌うこと—国語教室のパフォーマンス」というテーマで「よむよむ座」に出演することになった。さらに続けて翌年の2004年6月23日、「教室はパラダイス—町田式パフォーマンスのすすめ」というテーマで、再度「よむよむ座」に出演する機会があった。わたくしは国語教育において金井の言う「口承芸能や演劇、詩歌の朗唱、楽曲の歌唱、そして外国語の作品の朗読など」を積極的に導入している立場として、氏の「ライフワーク」に賛同し、2回の「よむよむ座」において具体的な授業構想のモデルを提案したいと考えたものである。

2回の「よむよむ座」において主として扱ったのは、詩歌の朗読である。30分間という短い時間の中で、詩の授業に対するわたくしの考え方を凝縮させて、重要と思われる要素を可能な限りすべて取り入れてみた。そこで続けて、国語科の授業で詩歌をどのように扱うかという課題について、わたくしの考え方と授業構想を紹介しておきたい。

## 5 詩をどのように扱うか—声に出して読む活動を中心に

教育現場において、韻文の授業はとかく敬遠されがちである。効果的な学習指導の方法が見えにくいということが、その最大の理由と思われる。特に学年が進むと、韻文の授業は作者に関する教材研究に基づく教材の解釈を中心とした授業内容が主流を占めるようになる。それはともすると、受講者が教師の解説を単に受け止めるという、一方向型の形骸化された授業になりがちである。その方向を大きく転換するものとして、音読・朗読を取り入れた詩歌の授業を位置付けることができる。

例えば谷川俊太郎の詩などは、声に出して読む活動を主体とした教材として扱うことができる。この方向の教材開発は、音読・朗読、さらに群読を取り入れた韻文の授業に直結する。子どもたちが硬直した身体を開き、生き生きとした声を出す時間を国語教室の中に確保したい。詩歌の授業の場合、黙読による読解を中心とした解釈型の授業から、声の復権を目指す表現型の授業へと、授業のパラダイムを転換する必要がある。

谷川俊太郎には自作詩の朗読ライブがある。また波瀬満子の詩朗読パフォーマンス、福島泰樹の短歌絶叫コンサート、そして詩のボクシングなど、音読・朗読に関連した様々な試みが話題になっている。これらの試みはテープ（CD）やビデオ（DVD）などの視

聴覚資料として、授業で紹介することができる。

声を生かした詩の授業を展開する際に、まず教材として取り上げたいのは谷川俊太郎の詩である。特に『ことばあそびうた』（福音館書店、1973. 10）の系列は声になりやすく、多くの先行研究・実践が出ている。その中で足立悦男は、「ことばあそびの詩」の教材を「国語学力の表現力、想像力を育てる、重要な教材領域」として位置付けている<sup>4</sup>。さらに「ことばあそびの詩」の持つ音読教材としての独自の役割に注目し、「ことばの音声化（肉体化）」を重視している。谷川の『ことばあそびうた』を扱う際に、特に留意すべき点であろう。詩を「音声化」することによって、「表現力」を育てることが授業の目標となる。「よむよむ座」においてわたくしが取り入れたのは、続『ことばあそびうた』系列の詩である。

詩の授業を構想する際には第一に、音読・朗読・群読などの声の活動を基盤にする必要がある。続けて詩の授業のモデルを紹介すると、まず大きく「導入部」「展開部」「総括部」の三段階に分けて構想する。「導入部」は、視聴覚資料を通して作者谷川俊太郎の考え方を紹介するところから出発する。谷川と波瀬満子の対談が収録された市販の音声資料や、テレビ番組に出演した谷川俊太郎の談話を映像で紹介する。いずれも、詩はもともと声であったことを踏まえて、声に出して読むことの重要性を説くものである。詩人の考え方にしっかりと耳を傾ける活動を、授業の導入としたい。

『ことばあそびうた』中から、「ののはな」「いるか」「かっぱ」「さる」の四編を教材として取り上げる。学習者にまず黙読させてから、続けて音読をさせて、それぞれの読後感について話し合いをする。黙読したときには「ひらがなばかりで読みにくい」、「どこで区切ったらいいのか分からずに個々のことばの意味が取りにくい」、のような感想が出される。ところが同じ詩を声に出して読むと、「リズムがあって読みやすい」という感想が変わってくる。学習者に繰り返し音読させた後で、谷川と波瀬満子の朗読を鑑賞する。

『ことばあそびうた』の授業では、続けて群読という方法を紹介する。声の復権を通して教室を活性化させるという目標を掲げるとき、複数の子どもたちで読む群読は効果的な学習活動となる。『群読の授業』（明治図書、1990. 7）の中で、高橋俊三は次のように述べている。

群読には、人を巻き込んでいく力がある。学級を前にして、一人では声が出ないという子も、級友と一緒にけっこう声を張り上げるということがある。一人で読む朗読は嫌いだけれど、群読は好きだという子が幾人もいる。朗読も好きになって欲しいのだが、まずは、この子らを認めたい。声に出すことの抵抗と障害をなくし、発声化を楽しむことが第一だ。

同書において高橋は、具体的な群読指導の方法を明らかにしている。特に「発声化を楽しむ」という要素を重視して、家本芳郎『群読をつくる』（高文研、1994. 10）などの先行実践も参考にしつつ、『ことばあそびうた』の群読を実施する。5人から6人のグループに分けて、あらかじめ教師の側で定めた脚本に即して群読をさせる。例えば「ののはな」では一行ずつ分けて読む、「いるか」は掛け合いの形態で読む、「かっぱ」と「さる」は輪唱のようにして速いペースで読むなどの工夫をする。様々な脚本を作成して分担して読むことによって、一編の詩の世界を多様に表現することができるという点に、群読の効果を認めることができる。グループから要望が出された場合には、そのグループ独自のプ

ランを検討しつつ実施してもよい。

グループ内で練習をさせてから、クラス全体で群読の発表会を実施する。その際にBGMを用意して流すことによって、楽しく読むことができるように配慮する。教材として選択した詩を徹底的に声に出して読む活動を展開することが、この授業の眼目である。

音読・朗読、そして群読によって、声に出して詩を読むことの楽しさを実感させることができれば、今度は「展開部」の活動に移る。目標は、多様な詩に接してその中から自身の感性と響き合う作品を発掘するという点である。出会いのきっかけとなるのは、例えば図書館にある詩歌関連の本が好ましい。図書館に詩歌関連の蔵書があれば、一時間を配当した図書館での授業ができる。すなわち学習者が図書館で自由にいろいろな詩歌の本に接して、その中から特に好きになった詩を一編選択してノートに写す。ノートにはその詩を選んだ理由も書いておく。

個人で好きな詩を選ぶことができれば、今度はその詩をグループで相互に紹介し合う。グループ編成は「導入部」と同じメンバーとする。グループの中で適宜ノートを交換して、友人の選んだ詩とその理由に目を通す。一通り作品の紹介が済んだら、今度は話し合いをして、どのメンバーの選んだ詩が最も多くの支持を得ることが出来るかを検証する。そして最終的には、そのグループで推薦する詩を一編選ぶ。

グループの中で、相互にメンバーが選んだ詩を読み合うことは、学習者の内部に多様な詩との出会いをもたらす。教科書の詩を一斉授業で扱う以上に、貴重な成果が期待できる。

グループでの学習は、続いて選んだ詩を発表するための準備へと展開する。発表に関しては、「導入部」で紹介した詩にならって、群読によって発表することを主な活動とする。そのために、選んだ詩についてグループ内でよく話し合いをして、効果的な読み方を工夫する。脚本を作成して、何回か実際に読む練習をさせるとよい。

「総括部」としての発表に関しては、あらかじめ基本的な形態を定めておく。選んだ詩をグループでプリントに写して提出し、あらかじめ印刷をして発表の際にクラス全員に配布する。まずメンバー全員が教室の前に出て、リーダー(班長)が選んだ詩の題名と作者名を発表する。続いてメンバーで分担して群読を実施する。そのとき、グループで工夫してBGMを用意して、その音楽を流しながら群読をしてもよいことにする。

群読を中心とした発表とするため、全員で読んだ後はあまり時間をかけずに、その詩の簡単な感想を代表者が発表して終了とする。発表を聞く側の学習者に対しては、群読を聞いてその詩の感想をメモするように指導する。すべてのグループの発表が終了したら、改めて最も好きな詩を一編選んでその理由をまとめることにする。

以上のような指導過程の展開によって、学習者は詩の世界に浸り、詩に親しむことができる。詩の重要な要素である韻律に着目し、声に出して読むという活動を通して、詩の韻律に触れるのが本節で紹介した授業構想の要諦である。加えて好きな詩との出会いを促すことにも、授業の主要な目標を置いている。教材として教師が与える詩だけでなく、学習者の出会いを交流することによって、教室にはより多様な教材が生成する。ここで紹介したのは、そのような特色を生かした授業構想でもある。

## 6 再び「よむよむ座」での実践に即して

わたくしが担当した2回の「よむよむ座」において、共通の教材は詩であった。2003年の「よむよむ座」では、谷川俊太郎の『ことばあそびうた』の中の詩に続けて、中原中也の「汚れつちまつた悲しみに」と「坊や」を教材として選んだ。わたくしが試みたのは、詩の朗読から群読へと展開することであった。『ことばあそびうた』系列の詩は群読に適しているという判断が出されるが、中原中也の詩は群読という形態には馴染まないという意見も予想される。群読には、特にどの詩を教材とするのかを厳密に選択しなければならない。わたくしはあえて中也の詩を選んだ。

それは、歌手友川かずきの歌と、歌人福島泰樹の短歌絶叫という形態に接していたからでもある。フォーク歌手の友川かずきは、中原中也の詩をこよなく愛して、その詩に曲をつけて自ら歌うというパフォーマンスに取り組んでいた。わたくしは友川のアルバム「俺の裡で鳴り止まない詩」に着目した。このアルバムに収録された中也の詩の中から、「汚れつちまつた悲しみに」と「坊や」を教材として選んだ。一方福島泰樹は、特に中原中也の詩を歌人としての感覚から短歌として再度表現し、その短歌をさらに全身で奏でる声の芸術としての「短歌絶叫」コンサートで表現している。特に「坊や」の詩は、福島によって連作の短歌となり、さらに友川かずきとのジョイントコンサートという形態で、独特の表現へと深められていった。その点を授業構想に生かしたものである。

「汚れつちまつた悲しみに」では、参加者全員に群読のための脚本をまず作成させた。全員で読むために、効果的に読む箇所を分担を考えさせたわけである。参加者は思い思いのプランを考案したが、それを交流して最もふさわしいプランの一つを選ぶことにした。そのうえで、そのプランを共有したうえで、実際にプランに即して群読を試みることになる。当方で用意したのは、まずBGMであった。「汚れつちまつた悲しみに」がより効果的に表現されるためのBGMの吟味も、思いのほか苦労させられたグループ学習においては、ぜひ学習者自身にBGM選びに挑戦させてみたい。「よむよむ座」においてわたくしが選択したBGMはゲームミュージックである。すなわち、すぎやまこういち作曲の「ドラゴンクエストIV」から「エレジー」と題する曲を選択した。まず曲の冒頭箇所を紹介して、イメージを持たせる。そして、あらかじめ定めた群読プランに従って、参加者全員で詩の群読を展開する。BGMに合わせたように、群読が展開し、「よむよむ座」の舞台となった教室には、参加者の声が溢れた。

続いて「坊や」の詩を取り上げる。友川かずきが作曲したメロディをBGMとして奏でつつ、参加者が一連ずつ朗読し、その後で福島泰樹の「中也断唱」の短歌を朗読する。詩と短歌に通じ親しんでから、ギターを演奏しつつ友川かずき作曲のメロディで「坊や」を歌い、その歌をバックに参加者全員で交代しながら短歌「坊や」を朗読する。参考に福島泰樹の短歌絶叫コンサートの録音を紹介したが、そのインパクトのある声の表現は、参加者の心に響くものであった。それを参考に、「坊や」の歌をバックに短歌を朗読する。このコラボレーションこそが、「よむよむ座」で試みた声の表現にほかならなかった。

翌2004年の「よむよむ座」では、歌詞を扱うことにした。ちょうど季節が七夕の前ということで、「たなばたさま」という童謡の歌詞の教材化を試みた。この歌詞の教材化という点に関しては、いくつかの論文<sup>5</sup>で実際の授業を紹介している。わたくしが教材化したのは、例えば学校の校歌や、日本の唱歌・童謡に属するものである。その歌詞を扱うことによって、実に多様なことばの学びを実現することができる。歌詞はきわめて有効な国

語科の教材となる。

歌詞を教材とした授業においては、一通り学習が終了してことばに対する認識が深められたところで、再度朗読を試みる。そしてその後で、必ず曲を付けて歌うことにする。その際に教師自らが楽器を用意して、簡単な伴奏をすると効果的である。音楽の時間とは異なる授業ゆえに、決して上手に歌う必要はない。ことばの意味を学習して、そのうたの世界を理解したうえで、うたの雰囲気をとらえながら心を込めて歌うように促す。教師の伴奏も、学習者の声を引き出すための道具として位置付けておきたい。

大切なことはうたの意味が理解できたところで、情景を想像しながら曲を付けて歌うという活動である。この身体表現活動もまた重要なことばの学習である。音楽の授業との関連で扱うのもよいが、国語科の授業の中で「声に出して歌う」という活動を前向きに取り入れる価値があると考えている。

わたくしにとって2回目の「よむよむ座」でも、参加者とともに授業を創るという施設を貫くことにした。「たなばたさま」のうたは、様々な工夫を経て、群読のための素材へと変貌することになった。そしてこの回には、さらに「書くこと」の活動をも加えて、たなばた伝説を踏まえたストーリーを織り込んだ新たな歌詞の創作という課題を展開することにした。そのオリジナルな歌詞のうたを歌うことで、ことばの「理解」から「表現」へと結ぶというのが、わたくしの目論見であった。

この回にも、担当者自身がギターやオカリナなどの楽器を持ち込んで演奏するという試みを目指すことにした。これは国語教師のパフォーマンスでもあるわけで、教師自身のパフォーマンスによって授業を展開するということの重要性を参加者に訴えることにもなった。教師にとって、まさしく「教室はパラダイス」として受け止められることが重要なのである。教師にとって、教室は最も楽しい、しかもスリリングな場所でなければならない。授業はまた、教師が全力で取り組むパフォーマンスでもある。学習者を巻き込んだ最高のパフォーマンスを目指して、教師は日々努力する必要がある。

## 7 声の復権による国語教育の活性化を求めて

効果的な国語教育を追求するに際しては、常に子どもたちのいる「いま、ここ」に目を向けて、彼らのことばの現実を的確に把握しなければならない。例えば携帯電話におけるメールの普及という現象は、学習者のことばの生活に多大な影響をもたらしていると見ることができる。直接顔を突き合わせて話すということよりも、携帯メールというツールを通じた間接的なコミュニケーションが、彼らの中に広まっている。届いたメールに対する返信の速さに友情の程度を重ねるという傾向は、たわいのないやり取りの頻繁な交流を強要する。

インターネットを通してのショッピングの普及は、店頭における店員との声の交流の場を奪ってしまった。また新しい小型ゲーム機が次々と発売され、子どもたちの人気を呼んでいるのも事実である。直接顔をつき合わせての声によるコミュニケーションは、このような現実によってますます後退することになる。

学校の中に生き生きとした声を溢れさせるための活動を取り入れることを、具体的な授業の構想として提案しておきたい。元気よく身体から声を出して相手に届けるという基本

的な活動をはじめとして、具体的な声の学びを展開するための多様な授業構想を工夫することができる。その授業の目標は、衰退した声を子どもたちの身体に取り戻すこと、そして声によるコミュニケーションを活性化させるということである。そして、これらの声の復権に関わる活動を授業に取り入れることによって、授業を活性化させるということも重要な目標となった。子どもたちの声が溢れる授業は、全体的に生き生きとした雰囲気になったものとなる。

効果的な授業を展開するためには、教材開発はきわめて重要な課題となる。特に声の活動に関わる「話すこと・聞くこと」の領域は、効果的な教材の発掘に意欲的に取り組む必要がある。

声に関わる教材に関しては、子どもたちに身近な場所からも様々な素材を意欲的に探索して、教材化の可能性を検証する必要がある。授業の目標が明確になれば、その目標に即した教材開発の方向は絞られることになる。わたくしは、いわゆるサブカルチャーと称されるものの中にも、国語科の教材として成立するぎりぎりの境界線上に置かれるものもあると考えて、意欲的な教材開発を進めてきた。教材開発の重要な観点として、子どもたちの興味・関心の喚起という要素がある。これは「話すこと・聞くこと」の領域に特化されるものではないが、特に声の活動を展開する際には、必要不可欠なこととなる。学習者にとって、いかに興味・関心のある教材が提供できるかという点に、授業の成否がかかっている。彼らの自然な声の活動につなげるための教材開発が基本である。

教材開発の際に特に配慮が必要な点は、効果的な視聴覚教材の発掘である。教科書に収録される教材には、様々な制約が伴うことはすでに触れた。そこで教科書教材の補助的な扱いとしてでも、効果的な教材の開拓は必要となる。特に声の活動に関わる教材としては、実際の「話すこと・聞くこと」の場面を収録した視聴覚資料が有効である。具体的な資料の使い方については、テレビやラジオで放送される放送業界の「話し方」講座なども参考にすることができる。また、子どもたちの声の活動を視聴覚機器に収録した資料を、教材として活用することも工夫する必要がある。

教材開発とともに、実際の授業をどのように構想し実践するかという点もきわめて重要な課題である。わたくしは教材開発力と授業構想力を、教師の最も基本的な力量としてとらえている。効果的な教材を発掘したら、教師の中にそれを用いた授業のイメージが構築されなければならない。一時間の授業展開に関する具体的なシミュレーションを思い描くことができれば、それを実際の授業に応用することはさほど困難ではない。教師には、常に多様な授業構想を持つことが求められる。

ところで、「話すこと・聞くこと」の授業で重要なことは、子どもたちの具体的な活動を充実させるということである。いくら効果的な話し方について指導を徹底しても、実際に子どもが「話す」という活動をしなければ十分とは言えない。実際に声を出すことに関わる活動を、授業中に展開することが大切である。声に関わるどのような活動を、どの程度設置するのかという点が、授業構想の基盤になければならない。

2回の「よむよむ座」の試みは、わたくしにとって具体的な授業構想の場所であった。金井は先に引用した「朗読の現場を創る」という論文の中で、わたくしの試みについて次のように総括している。

町田守弘さんはギターやオカリナなど楽器の演奏を、詩歌の韻律をつかむ補助の道具

に用いておられた。また、CDの楽曲を通奏低音のように低く流すことで、朗読する気持ちやそれを聴く気持ちに変化が出ることを、聴衆に体感させる場面もあった。これは日々シャワーのごとく消費しているテレビのドキュメンタリー映像を観るときに、語りやBGMなどの音楽が果たす役割を考える、メディア・リテラシーの学習にも繋がっていく。

特に後半で指摘されたメディア・リテラシーの学習に繋がる要素は、わたくし自身今後の重要な課題として受け止めたものである。国語科授業における声の復権の課題は、メディア・リテラシーの課題とも地続きである。メディア・リテラシーの問題をも視野に収めたうえで、国語科授業における声の復権を求める試みを、今後とも続けたいと考えている。そのために、多くの実践を交流することが今後の重要な課題である。

---

#### 注

- 1 町田守弘『声の復権と国語教育の活性化』（明治図書、2005. 10）。
- 2 竹内のレッスンに関しては、『「からだ」と「ことば」のレッスン』（講談社、1990. 11）、『日本語のレッスン』（講談社、一九九八・四）、『教師のためのからだことば考』（筑摩書房、1999. 1）などの文献から、その概要を知ることができる。また鴻上尚史の『発声と身体レッスン』（白水社、2002. 4）にも、このレッスンに関する具体的な紹介がある。
- 3 この「国語表現論」の授業に関しては、第2章第3節で言及した。
- 4 足立悦男「国語科授業を、より豊かに―『ことばあそびの詩』の役割」（『月刊国語教育研究』1993. 9）、続く引用も同じ出典である。
- 5 第5章第1節で歌詞を用いた授業に言及する。